

# 万葉の寄物抒情歌

—植物を主として—

大 窪 梅 子

を叙べる方法である。

こうした詠法は右四巻中の寄物の項目下にのみ限るものでなく、他巻の諸所に数多く見られるものである。

いったい何かの物によせて心情を表現する場合に様々な様相がある。

1 表すべき心情に最も適した何かの物又は現象を点出して情景を描き出す。

秋さらば見つつしのへと妹が植ゑし宿のなでしこ咲きにけるかも

3 四六四 大伴家持

心ぐきものにそありける春霞たなびく時に恋の繁きは

8 一四五〇 坂上郎女

形見のナデシコによって妹を恋い、たなびく春霞によって恋の物思いをのべる。いずれもその作者の心情によくかなうものを取り入れている。

2 或る物を媒介として心情をのべる。

万葉集の七巻・十巻・十一巻・十二巻等に「詠〱」又は「寄〱物陳〱思」という標題がある。これらはつまり、或る物に寄せて自己の思を述べるという意味で、自己の心情をそれ自体のままに述べる方法、いわゆる十一巻・十二巻等に見える「正述心緒」と名づける詠法に対するものである。

例えば、後も逢いたい、という心情を表わすに「正述心緒」では恋ひつつも後も逢はむと思へこそ己が命を長く欲りすれ

11 二八六八

というような心理のみの叙述に一貫するのに対し

木綿裏白月山のさなかづら後もかならず逢はむと思ふ

12 三〇七三

のようにサナカヅラの蔓先が、その先端をどこまでものばしているうちに又いつの間にかめぐり逢うという生態を捉え、それに托して心情

吾が宿に黄変つ蝦手見る毎に妹を懸けつつ恋ひぬ日はなし

8 一六二三 田村大嬢

足柄の箱根飛び越え行く鶴のともしき見れば倭し思はゆ

7 一七五

カヘデやタヅを見たことにより、それを媒介にして妹を思い、或は倭を思うのである。

3 同語、同音、或は類似の音を持つものを借りて心情をのべる。いわゆる序詞といわれるものである。

草香江の入江に求食る蘆鶴のあなたづたづし友無しにして

4 五七五 大伴旅人

みなと葦にまじれる草の知草の人みな知りぬ吾が下思

11 二四六八

アシタヅ||たづたづし、シリクサ||知りぬという音の關係に物と心とが結びついているのである。

4 心情に類似した、或は共通の物象を借りて来て、比喻の形を以てのべる。

道の辺の荊の末に這は豆のからまる君を離れか行かむ

20 四三三二 文部鳥

絶えずゆく明日香の川の淀めらば故しもある如人の見まくに

7 一三七九

訣れにのぞむ時の妹の姿態は這いまつわっている豆の生態そのままであり、流れゆくべき川がもし淀んで流れなくなったら、何かわけが

あるのだろう、というのは人間界と共通した現象である。

5 同じく比喻であるが、一首全体に、本意は裏に隠して表面は他の事柄を以てのべる、つまり一種の諷刺的比喻である。この中には擬人的なものも含まれる。

吾が宿に生ふる土針心ゆも想はぬ人の衣に摺らゆな 7 一三三八  
紅に衣染めまく欲しけども着てにははばか人の知るべき

7 一二九七

ツチハリは女を意味し、クレナキに染める、とはそぶりが表面に現れることを意味する。どちらも全体が比喻であって、比喻の部、本意の部という区別はない。ツチハリの歌は擬人的である。

6 本意と同質のもの、或は異質のものを採り来って本意と対立させ、それによって本意を強調する。

毎年に梅は咲けどもうつせみの世の人君し春なかりけり

10 一八五七

世間は空しきものとあらむとそこの照る月は満ち闕けしける

3 四四三

梅とうつせみの君とは異質の対比、世間の空しさと月の満ち闕けとは同質の対比、そしてどちらも、君には春のないこと、世間の空しいものであることを強く言い表わそうとするのである。

7 人間の願望を他物に托す。

天飛ぶや鳥にもがもや都まで送り申して飛び帰るもの

5 八七六 山上憶良

父母も花にもがもや草枕旅は行くとも捧<sup>た</sup>てて行かむ 20四三二五  
短時間に自由に遠距離へ飛んでゆける鳥、一緒に伴なって国の果てにまでもつれてゆける花、その不可能な人間の羨望から生れるものであらう。

以上は、物象に托して心情を述べる方法の数箇の例を示したに過ぎない。探求すれば、この他にも種々な方法があるであらう。

「寄物」の物としては諸種の器具類、例えば、玉・釧<sup>くし</sup>・弓・琴・衣・糸・船等多く身近に親しむものがあり、自然物や自然現象はさらに広く、天体・氣象・地象・動物・植物と、あらゆる自然界のものを網羅しているといつていいほどである。

その中でも最多数のものは植物である。

本稿はその寄物の対象となった植物を主軸として筆を進めてゆきたい。

## 二

万葉集に現れる植物名称約一八〇余、そのうち、いわゆる「寄物」と称するものの対象となった植物はざっと九〇ほどあらう。木・草、及びそのいづれにも属する花、と大別して名称をあげてみる。

木（植物名称はすべて古典仮名遣い）

アベタチバナ・カシハ・カヅノキ・カツラ・クス・クハ・コナラ・コノテガシハ・サウケフ・サナカヅラ・ナラ・シヒ・スギ・タチバナ

・ツキ・ツタ・ハリ・ヒサキ・マツ・マユミ・モモ・ヤナギ・ユヅルハ

## 草

アサ・アシ・アハ・イネ（ホ・ワサダ・ナヘ・タネ等を含む）・イハギヅラ・ウマラ・オホキグサ・草・クソカヅラ・コケ・コモ・シバ・シリクサ・スゲ・ススキ（ヨバナも含む）・タハミヅラ・タマカヅラ・チガヤ・ツヅラ・トコロヅラ・ナノリソ・ナハノリ・ニコグサ・ヌナハ・ネツコグサ・ハマユフ・ミル・ムギ・ムラサキ・藻（玉藻・川藻・沖つ藻等を含む）・黄葉・ヤマスケ・ワカメ

## 花

アサガホ・アシビ・アヂサキ・アフチ・イチシ・ウケラ・ウノハナ・ウメ・オモヒグサ・カキツバタ・カホバナ・カラアキ・クレナキ・コナギ・サクラ・シキミ・ハナタチバナ・ツキクサ・ツチハリ・ツジ・ツボスミレ・ナデシコ・ネブ・ハギ・花・ハナガツミ・ヒメユリ・フヂ・ヤマチサ・ヤマブキ・ユリ等

このほか竹類にササ・シノ、果実にカシノミ・タチバナ・ヤマタチバナ・モモなどがあり、根にスガノネ・ヤマスゲノネなどがある。

以上の中には、単純な枕詞（例えば、アカネサス・ヌバタマノな

ど)や加工品(ツゲ櫛・コモ枕など)の一部などは省いてある。

万葉植物の約半数は物に寄せるという形で心情表現を援助する為に使われたことになり、さらにもっと広く情景を示す景物として採られたものを合せば、万葉植物の大半は、人間心情の世界にその生命を賦与されたものといってもいいであろう。

以下、寄物抒情の各種表現法のうち、本稿には次の三点についてそれを植物の中に見つけてゆきたい。

1 A一首に比喩の部と本意の部と共存し、両者の関係は内容的に関連するもの。

B一首全体が比喩で出来ており、本意は裏面に隠れている形。

2 内容上の関係は薄く、主として音韻の関係によるもの。これを序詞と呼んでもよい。

3 ある物に対して願望する形。

### 三

1 比喩の方法には「如し」などを用いて物と本意を直接に結びつけるもの、或は暗示的に比喩する法、又は擬人的方法など様々あるが、本意への関連はすべて意味によってつながるものである。

しかし、なかには純粹な音調の関連、例えば「葦鶴の<sup>あしたづ</sup>あなたづたづし」「知草の<sup>しぐさ</sup>人皆知りぬ」というような、音と音との結合する、いわゆる序詞と呼ぶ形に見えながら、一方に意味性の関連をも含んで

いると思われる例もある。

道の辺の尾花が下の思草今さらになど物か思はむ 10 三二七〇

は、同語「思ふ」の反復であることは確かだが、それは同時に比喩として思草のようになだれて物思いする、という解釈も可能である。

植物の外にも「母が養<sup>か</sup>ふ蚕のまよごもり<sup>か</sup>こもれる妹11二四五九」というような例もあり、これも同様に同語コモルを反復させる一方に比喩としてまよごもりするように隠れている妹、と解釈してもいいであろう。

まず比喩のA型、つまり比喩部と本意部と共存する形では、比喩物は本意に対してどのような関わりあい方をしているであろうか、大別して二つある。

その一つは、比喩物が本意の心情・観念などに関わるもの、つまり、  
形象↓心情・観念という形である。

もう一つは比喩物の形象がそのまま本意の形態に結びつくもの、  
形象↓形態という形である。そして比喩歌の大部分は前者である。なお、このほか少いけれども形象が時の観念に結びつくものもある。

(1) 形象↓心情・観念

1 世の人・世間<sup>よなか</sup>

人生やこの世界の真相を無常なものとして観ずる時、この比喩を自然の中に求めるとすれば、流れて止まぬ川水、海上を行く船の跡の忽ちにして消え去ってゆくはかなさ、或は山に去来する雲、霜や露の消滅、そして植物にとるならば落花・落葉の相などは最もふさわしい材

料と言える。

この集の中にこの対自然観は相当に広まっている。流水7一二六九・航跡3三五一・雲3二四二・露5八八五等々、自然の中に人間世界と類似の相を見出す観察眼は万葉作家の中にすでに鋭くなっている。

あしひきの山さへ光り咲く花の散りぬる如きわが王かも

3 四七七 大伴家持

聖武天皇の皇子安積皇子<sup>あさか</sup>を悼む歌である。史を見ると皇子の死には疑問のふしがあるようだが作品はそれには触れない。花の散るような王と比喻にしたところに若年俄かに薨じた皇子の死を暗示しているかのようにある。

落花を人間の死や無常の象徴と見ることは、「花桜まだ盛りにて散りにけむなげきのもとを思ひこそやれ（成尋法師・新古今集・哀傷歌）」「昨日までかげと頼みし桜花ひとよの夢の春の山風（拾遺愚草・無常）」など後世に幾つもの例を見出すが、たとえ数少いとはいへ、すでに万葉の中に出現していることは注意していいことであるう。

同じく死を意味する落葉、紅葉がある。

真草刈る荒野にはあれど黄葉<sup>もみぢ</sup>の過ぎにし君が形見とそ来し

1 四七 柿本人麿

見れど飽かずいましし君が黄葉<sup>もみぢ</sup>の移りい行けば悲しくもあるか

3 四五九 県犬養人上

二首ともにこの場合の紅葉（万葉では多く黄葉と記すが、ここには

今日通用の文字で記す）は枕詞であるから、形式上から言えば本意とは無関係なものとして解釈の上からは一応除いてもいいわけである。だが、もともとこの枕詞は実景にもとづく比喻ではあるまいか。使用が慣れるに従って本意との意味的関連性が薄くなって単なる枕詞とされていったと考えられる点がある。

集中モミヂを死を意味する「過ぐ」「移る」の枕詞とした用例は七例ある。そのうち「過ぐ」に懸かるもの、人麿が二首、人麿歌集が一首、九巻に一首、十巻一首、十三巻一首。「移る」に懸るものが県犬養人上の一首となっている。この中で時代的に早いのは人麿・人麿歌集、及び十三巻かと思うが、人麿に関するものが七首中三首までを占める、ということとは、この枕詞創始に一つの暗示となるのではないか。人麿の作品にはモミヂが八首の作品に現れ、その内五首が挽歌である。人麿はモミヂの美や、その落葉の相が何か死に結びつく表象と見たのではないかと思えるほどである。「黄葉」を「過ぐ」にかける枕詞の用法も、或はそうした人麿に多分に関係がありそうに私には思える。

## 2 相聞

比喻は相聞歌において最も花々しい活躍をする、といってもよいほど、相聞歌の比喻は見事である。前に挙げた七巻・十巻・十一巻・十二巻の寄物歌はみな相聞の心情を表現するために、何か他物を借りるのである。

ことに自然物が比喩歌の中に占める分量は絶大である。

恋情はもとと純直な心情だからそれだけを表出するならば一首として単純になる。どれほど深い心情でもどうしても観念性が強くなってしまう。そこに比喩の形を以て恋情にふさわしい具象物を持ちこむと生彩が加わってくる上に恋情そのものの性格まで鮮明になる。

万葉相聞歌の特徴の一つは、この比喩の巧みさ、美しさにあるといつても過言ではあるまい。万葉集の中の著名な作家で相聞歌を遺した人の作にこの手法を全然採用しなかったというのは額田王他僅かなものではなからうか。

柿本人麿などは、長歌の中にこの手法をとり入れて成功している。しかも相聞歌だけでなく、挽歌の中にも相聞的情緒を比喩に借りて歌うのである。人麿の長歌における比喩の特徴は、まことに生彩に溢れた描写の巧みさである。たとえば一九四番の泊瀬部皇女を玉藻に喩えた歌、一九六番の明日香皇女を同じように玉藻に喩えた歌、さらに一三一番歌の石見の角の里の妻を玉藻に喩えた歌等々、彼は、この手法を縦横に使用して相聞心情を表現する。

み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へど直に逢はぬかも 4四九六  
を見ても上三句の比喩の部に実<sup>ただ</sup>に力を入れて描写している。

この歌、おそらく人麿は実地において熊野の浦のハマユフを見て、或はかつて見たことがあって、それを己の恋情の比喩に生かしたのであらうと思う。

ハマユフは我が国では温暖な海浜地帯に自生するヒガンバナ科のオ

モトに似た草である。これを比喩にしたのはその草の「百重なす」という状態である。百重なすように幾重にも心に思う、と懸るのである。では、その「百重なす」という状態はこの草の葉の繁り具合をいうのだろうか、それとも花が一茎に幾つも寄り集まっている状態を指したものののだろうか。古来これについて意見が分れているが、この「百重なす」の一句だけでなく、上三句全体を一つにして考えて見るならば、これは単に一本のハマユフの生態を言ったものではないことに気づく。熊野海岸という広い背景の中に立つハマユフの群落を、かく表現したにちがいない。この作品としての比喩の意味はそう解釈するのが妥当である。一本のハマユフの葉の繁り、一茎数多の花に比喩を求めたとするなら、「み熊野の浦」を持ち出したことは単なる説明に終ってしまう。人麿の作歌技巧としてそのような幼稚な表現はしないであらう。「み熊野の浦」なる句は、この比喩の中で生きた描写なのである。そういう生きた意味に依る比喩を持つからこそ、本意が生命的な強さを以て迫り得るのである。自然の形象がそのまま作者の心理へと転身してゆく見事さをこの歌は示している。

夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものを

8一五〇〇 坂上郎女

これは女性の包み藏した苦しい恋情をかく歌ったのである。ヒメユリは赤い色の小形のユリで、それが夏草の繁みに紛れて咲いている。そのあらわに表面に立たない姿が「知らえぬ恋」の象徴とも言える。ことに、小さい、赤い、という条件はこの場合の恋情の性質にさえ触

れている。人麿のハマユフの比喻は大きい景観の中に求めて作者の心情をよく表現したが、これは又ささやかな自然の一隅に求め得てこの一首を成功に導いたと言えよう。

武蔵野の草葉諸向き彼も此も君がまにまに吾は依りにしを

14 三三七七

秋の田の穂向の依れる片寄りに吾は物思ふつれなきものを

10 二二四七

二首とも植物の柔軟性に着目した比喻である。「諸向」はもろもろに向く、あちらにもこちらにも風に従って向く、の意で草の実態をよく捉えている。恋の相手の求めるままにどちらへなりとも靡きましよう、という心情の比喻にいかにもふさわしい。

「穂向の依れる片よりに」は、稲の穂が一方に片よって傾くという性質を、ただ君にだけ依る、の意の比喻にしたもの、いずれも、草の実態と作者の心情とが適確に結合してすぐれた相聞歌を作り出している。

又、心理は右と同じであるが、別の比喻で表現することもある。

秋の野の尾花が末の生ひ靡き心は妹に寄りにけるかも 10 二二四二  
水底に生ふる玉藻のうち靡き心は寄りて恋ふるこの頃 11 二四八二  
二首は大変よく似ている。この二首ばかりでなく、植物の柔軟性を、「靡く」という動詞を媒介として、人間の心理や姿態の比喻とする歌はこの他にも数多くの例がある。就中、藻類に多い。前記二四八二番歌に似た14 三五六二番歌、12 三〇七八番歌などは心理的に使用し

たものである。

とかく恋情につきまとい易い移り気ということも亦しばしば歌に詠まれる。

気の緒に思へるわれを山ぢさの花にか君が移ろひぬらむ

7 一三六〇

つき草の移ろひやすく思へかもわが思ふ人の言も告げ来ぬ

4 五八三

二首は相手である君の移り気を嘆くもの。前歌の「山ぢさ」は諸説あるが、イワタバコがよいと思う。そのイワタバコは岩石などの湿気のあるところに生えるチンヤに似た草で花の色は赤味ある紫。その花の色の移ろい易さ（牧野富太郎・植物記）、或はそのはかなさが、人心の移り易さに喩えられたもの。後の歌の「つき草」は今いうツユクサのこと、花の命は夕べを待たずして凋む、色は褪せ易い。それで移り気の比喻に使われる。ツユクサの歌は万葉に九首あるが、移ろう心の比喻にしたもの五首、消え入りそうなほど苦しい恋、の意味を比喻するもの二首、「借の命」に懸るもの一首、すべてはかなく消え去り、移りゆくものに喩えられる。この比喻は後世の歌人達に共鳴されたと見え、古今集・古今六帖・拾遺集等に万葉の中の歌が採られ、或は後世作者の模倣作も現れている。

恋情が外面にあらわれることを歌には「色に出づ」と歌う。その比

喩物の材料となるのは色の目立つ花や実、主として赤系統の色が多い。但し、ウケラのように、白色又は薄紅色の例もある。

恋ふる日のけ長くあれば吾が苑の韓藍の花の色に出でにけり

10 二二七八

あしひきの山橘の色に出でよ語らひ継ぎて逢ふこともあらむ

4 六六九 春日王

外のみに見つを恋ひむ紅の末採む花の色にいでずとも

10 一九九三

カラアキはケイトウのこと、ヤマタチバナはヤブコウジ、クレナキはベニバナである。ヤブコウジは赤い実が熟り、カラアキ・ベニバナ両方とも赤系統の花である。それがどれもみな本意の「色に出でよ」に懸っている。色に出る、とは心情が外部にあらわれ出ること、相聞歌では恋情が人目につくようになることである。現れたところは動作だが心情から発するものである。赤い色が著しく目立つから右のような花や実が比喩とされるので、発想はみな同じである。

植物の形象と人間の心理を結びつける比喩はまだこのほかにもあげられる。刈る草の〓思ひ乱れる、玉かづら〓絶ゆることなく、草根の〓繁き恋、石にこけむし〓恐けど、水草の花の〓あえぬがに思へど、鴨鳥の遊ぶこの池に木の葉落ちて〓浮きたる心、等々その例を数多く見出すことができる。

## (2) 形象↓形態

### 1 人間の面貌に関するもの。

道の辺の草深百合の花咲みに咲まししからに妻と云ふべしや

7 一二五七

吾が宿の時じき藤のめづらしく今も見てしが妹が咲容を

8 一六二七 大伴家持

いずれも女の笑顔の花に喩えたものである。他にも「花の如咲みて立てれば」というのが高橋虫麻呂歌集には二度も出てくる。一つは周淮の珠名、一つは勝鹿の真間娘子の形容である。

桃の花 くれなる色に にはひたる 面輪のうちに 青柳の  
細き眉根を 咲みまがり 朝影見つつ をとめらが……

19 四一九二 大伴家持

というような細かいものもある。容姿全体を比喩したものに次のようなものがある。

高円の野辺の容花面影に見えつつ妹は忘れかねつも

8 一六三〇 大伴家持

### 2 姿態に関するもの。

最も多いのは藻類である。

………和多豆の 荒磯の上に か青なる 玉藻沖つ藻 朝羽振る



風こそ寄せめ 夕羽振る 浪こそ来寄せ 浪の共<sup>もた</sup> か寄りかく  
寄る 玉藻なす 寄り寝し妹を 露霜の 置きてし来れば……

2 一三一 柿本人麿

人麿が石見国で妻に別れて京に上る時の長歌の一節である。「寄り寝し妹」を比喻する玉藻の描写は実に精細で生々としている。水中に揺らぐ玉藻の柔軟な姿は、当時恋情の比喻に最も好適なものとされたのであろうか、集中この種の用例はまことに多い。わけても好んで用いるのが人麿である。

ワカメ・ナノリソというような名称によるものは少く、「玉藻」という美しいイメージを起させる言葉を以てその水中の靡きを表わし、心理的・形態的両様の比喻に用いるのであった。

同じ柔軟な性質の萩には集中用例一四一首のうち、靡くといったものは実景描写に一首しかない。

ゆくりなく今も見が欲し秋萩のしなひにあらむ妹が姿を

10 二二八四

と、「しなふ」を使ったのがあるだけである。「靡き寝る」の比喻物は玉藻に限られている。

道の辺の尾花が下の思草今さらになそ物か念はむ 10 二二七〇

この歌は、一応、思草<sup>しそう</sup>||思<sup>おも</sup>う、という同語の重復を狙ったと見ることが出来る。しかし、もう一步進んで考えてみると、思草、今いうナンバンギセルの花の形は、その名のようにキセルを立てたようである。又、それは見方によると、ちょうど首をうなだれて思いにふける

女の姿をも連想させる。だから、形の上の比喻とも見ることが出来る。

道の辺の荊<sup>うぎ</sup>の末<sup>うれ</sup>に這は豆のからまる君を別れ<sup>はな</sup>か行かむ 20 四三五二  
防人の歌である。旅立ちに当って妻が夫にとりすぎる姿をノマメが荊にからまる姿に喩えたもので、その野草の生態を巧みにとりこんで比喻にしたところに田園性が現れている。

### 3 全体の容貌

下毛野<sup>しもの</sup>美可母<sup>みかも</sup>の山の小櫓<sup>こな</sup>のすま麗<sup>くは</sup>し児<sup>こ</sup>ろは誰<sup>た</sup>が笥<sup>け</sup>か持たむ

14 三三四四

千葉の野の児<sup>この</sup>手<sup>て</sup>柏<sup>かしは</sup>の含ま<sup>ほ</sup>れどあやにかなしみ置きてたか来ぬ

20 四三八七

見渡せば向<sup>むか</sup>つ峰<sup>へ</sup>の上の花にはひ照りて立てるは愛<sup>は</sup>しき誰<sup>た</sup>が妻

20 四三九七 大伴家持

第一は東歌、第二は防人歌、いずれも東国という風土が生んだ愛すべき比喻である。コナラは落葉樹だが、その若い頃、特に嫩葉の頃銀色をしてつぼんでいるさまは可愛らしい。多分、その頃を「ま麗し児ろ」の比喻にしたのであろう。コノテガシハは諸説あり、普通には側柏というヒノキに似た木があてられるが、この集にはもう一つコノテガシハを詠んだ歌がある。それにはこの側柏がよく該当すると思われるが、この歌の場合は、ヒノキのような木の葉では「含まれど」という、ごく若い娘の比喻としてはあまりふさわしいものとは言えない。

むしろ、カシハとか、ユナラの初々しい嫩葉のようなものがふさわしいと言えるのではあるまいか。説がいろいろに分れるが、私は後者の方をとりたい。

いずれにしても、第三の例歌とはちがつて、木の葉などが若い娘の愛らしさを比喩するものとして見出されるところに、自然物の関心が都人とは異なっていたということがうかがえて興味深い。

第三例は家持の作であるだけにまことに華麗な比喩である。前の二例とは大きい差である。同じ女性の全姿を形容するにも、田舎風と都会風、民謡的と文学的といった比較ができる。

4 行動・動作的なものとしてはどうしても動物に片寄る。ムササビ・モズ・カモシカなどの生態を描いてそれを比喩にしたものなど後世には見ないものであろう。

比多潟の磯の若布の立ち乱え吾をか待つなも昨日も今夜も

14 三五六三

敷たへの衣手離れて玉藻なす靡きか寝らむ我を待ちかてに

11 二四八三

第一例の方は東歌である。「玉藻」というような美しい語を使わず、ワカメという実名のままに用いたところは生活的である。そのワカメが水中で揺れ動くさまを、乱れる、と見てそれを女の行動の比喩としたのである。普通藻類が水にゆれるさまを表現するに「靡く」というのが慣例だが、この歌はそういう文学的既成表現をとらずに、自分の

実感のまま乱れると見てそれを女の比喩としたところ、第二の例歌の「玉藻なす靡きか寝らむ」と比較してみると地方的な素朴さがある。同じ比喩にもやはり都会性と地方性、貴族性と庶民性、文学性と生活性、といった相異のあることを発見する。

### (3) 形象↓時間性

万葉の植物にはその生態によって時の比喩となるものがある。

吾妹子に逢はず久しもうましもの阿倍橋の蘿生すまでに

11 二七五〇

コケは若い木には生えない。木も年経たものでないといつかない。その、樹木の長久性が人間世界の「長い時間」という意味の比喩に用いられる。愛人に逢わないでずいぶん長くなった。というべきところを具象的にアベタチバナにコケがつくまで、と言い表わしたのである。同様の歌は2二二八にも見える。

天飛ぶや軽の社の斎楓幾世まであらむ隠妻ぞも

11 二六五六

神聖なる楓は老樹である。その年代を経た木だから幾世の比喩となるのである。このほか、老樹古木が長い時間の比喩となるものにオミノキ・タチバナ・マツなどがある。

万葉の植物には蔓性のものが相当にあつてこれが様々な比喩に使われる。

マメ・フヂはそのからみつく性質を以て比喩になり、サネカヅラ・クズ・タマカヅラ・トコロヅラは強い伸長力が比喩にされる。又クソ

カヅラ・ツヅラ・イハキヅラ・タハミヅラ、それに前のクズやタマカヅラは切断しないでどこまでも続いてゆく性質を比喻にとり入れる。

高円たかまどの野辺は延はふ葛の末終に千代に忘れむ我が大君かも

山高み谷辺に蔓はへる玉かづら絶ゆる時無く見みむ因よもがも

20四五〇八 中臣清曆

11二七七五

大船の 思ひたのみて さな葛かろ いや遠長く わが思へる 君  
に依りては 言のゆゑも 無くありこそと…… 13三二八八

第一の例はクズのつる先が無限ともいたいほどのびてゆく、その形態を「千代」という長い時間の比喻に借りて来る。第二の例はタマカヅラのつるがどこまでも這ってゆく形をとって「絶ゆる時無く」の喩えとした。そして第三の例も亦、サナカヅラのつるが先へ先へとのびてゆく、それが「遠長く」の比喻に使われる。年代を経た木を以て長久の比喻とすることは当然だが、これは形から時間へ、という異なる次元を組み合せたところに特色がある。

なお右の長久の比喻に対し、次は短時間の比喻である。

紅の浅葉の野らに刈かる草くさの束の間も吾を忘らすな 11二七六三

刈つかった草の一束、それを束の間つかの序と見る説「古典大系本」に従えば比喻の部から外れることになる。「束の間」という語自体が、一握ほどの間「大言海」とすればすでに形態的なものにもとずいているわけだが、一応ツカノマ即ち短時間という意味と解してみれば上部の「刈る草の」を形態↓時間という関係の比喻と解してもよいように思

う。

なおこの同形のものが鹿の角にも使われている。(四五〇二)

#### 四

比喻のB型、一首全体を比喻とする形を万葉の作家は非常に愛好した。不明作家のみならず、有名な作家達もこれを使っている。

試みに第三巻「譬喩歌」の部を見ると全作品二五首のうち、この方法によらないと見えるものは二首しか無い。この巻は大伴家持編纂説もあり、ことに「譬喩歌」の部には大伴家関係の作者達が多く、万葉では都会風の作が多い。その中にこの比喻の様式が多用されていることは、一つの文学的技法としての価値を認められていたからであろうか。

他の巻には七巻・十巻・十一巻・十二巻の寄物歌の中に多く、その他、四巻の相聞歌にも散見する。

対象となった植物は次のようなものである。

花では、ウメ・カキツバタ・カホバナ・カラアキ・コナギ・ツチハリ・ナデシコ・ハギ等。

その他の草木では、オホキグサ・チガヤ・クズ・コモ・スゲ・タチバナ・ハリ・マツ・ムラサキ・モモ・ワカメなど。

このうち数でいえば花の中ではウメが一番多く、七首ほどのうち四首が三巻に、三首が四巻に、というように偏在している。これは集中梅の歌一八首の比率とすれば甚だ少いが梅花詠の大部分は自然描写

として現れ、修辭的に比喩や枕詞・序詞は大變少くその中にこれだけこの用法があることは注目されるところである。みな男性作家が相手の若い女性を喩えている。

妹が家に咲きたる花の梅の花実にしなりなば左も右もせむ

3 三九九 藤原八束

春雨を待つとにしあらし吾が宿の若木の梅も未だ含めり

4 七九二 藤原久須麻呂

全く表面は梅花詠である。

又、この中には諸種の染色に関係するものがある。

苗代のこなぎが花を衣に摺り馴るるまにまに何か悲しけ

14 三五六

吾が屋前に生ふる土針心ゆも想はぬ人の衣に摺らゆな

7 一三三八

白菅の真野の榛原心ゆも思はぬ吾し衣に摺りつ

7 一三五四

託馬野に生ふる紫衣に染めいまだ著ずして色に出にけり

3 三九五 笠女郎

衣を染める、とはつまり相手に靡くことである。染色という作業が現代のように専門的に工業化せず、もっと日常生活の中に広くとけこんでいた時代の所産であろうか。このほか、クレナキ・ツルバミなどで染めた色彩のことも亦同様な比喩に使われており、こういう表現法は一つの類型にまでなっていたものかと考えられる。

カホバナ・カキツバタ・カラアキ・ナデシコ・ハギなど、美しく或は可憐な花が女の比喩となるのは当然であろう。

しかし、なかにはオホキグサ・クズ・コモ・スゲなど、何故比喩にされたかと思うような、見た眼に貧しい草もある。だがよく見ると、これらは当時、皆生活必需品だった。オホキグサ・コモ・スゲは敷物に、クズは繊維材料に、またコモは敷もののほか枕も造る。スゲは敷ものの外に笠の重要な材料である。そうしたものが愛情の歌の比喩に登場するということは、やはりその仕事に従事していた人々の間から広まっていったものと考えられはしないだろうか。

これらの中で最も多いのがスゲで、しかも大半が笠づくりに関している。

かきつばた開沼の菅を笠に縫ひ著む日を待つに年ぞ経にける

11 二八一八

三島菅未だ苗なり時待たば著ずやなりなむ三島菅笠

11 二八三六

笠をつくることを「縫う」という。その仕事に従事する人の職業語であろう。笠を著る、ということが相手と結ばれることである。菅笠の歌は八首ほど見えるが、六首が十一卷所出で、一首が十二卷所出、十六卷に一首出ている。そしてその大部分が産地の名を詠みこんでいる。いずれも作者は不明。推測すればこれらはその土地で歌われる民謡の一種で、何かの事情のもとに十一卷に一かたまりになって収録されたものであろう。

比喩の形式は同じでも、都会の上層階級者はウメを素材にし、地方の庶民階級者は、それぞれの生業なり、田園環境の中から素材を得た、という差異がある、ということになる。

## 五

2 寄物抒情歌の音韻関係による方法は比喩に較べる時は量質ともに劣ると言え、これも抒情歌の場合相当に利用される方法である。これを序詞と言うならばその定義は人によって多少ずつ異なるが、本意とは一応内容的関連を持たない修飾というのが大ていの見解のようである。しかし、無関係とは言っても作歌以前の時所においてやはり何らかの関係あるものが素材としてえらばれたものと見られる作品が多い。ここには音韻関係のみとして「序詞」という語を用いておく。

一口に序詞と呼ばれている形にも二種類ある。

国栖<sup>くにす</sup>らが春菜採むらむ司馬<sup>しば</sup>の野のしば君を思ふこの頃

10 一九一九

春されば先づ三枝<sup>さんし</sup>の幸<sup>さい</sup>くあらば後にも逢はむ莫<sup>な</sup>恋ひそ吾妹

10 一八九五

のように、序詞の部分と本意の部分に同音又は同語、或は場合によっては類似の音をそれぞれ含んで、それによって両者が結ばれているものがある。しかし内容上の関連性は無い。

もう一つは

秋萩の花野の薄穂<sup>はく</sup>には出でずわが恋ひわたる隠妻<sup>こもり</sup>はも 10 二二八五  
朝づく日向ふ黄楊<sup>つげ</sup>櫛<sup>くし</sup>旧りぬれど何しか君が見れど飽かざらむ

11 二五〇〇

のように、一つの語、例えば「穂」「旧り」が、上をうける場合と下

へ懸る場合とで内容を異にする場合で、この種の或る者は懸詞として扱うことも出来る。

植物序詞の中にもこの二つの形式が見えるが、数量的には前者の方が比較にならぬほどに多い。

前者の場合は、本意の中の或る語と共通の音、又は類似の音を持つ植物名でなくてはならぬから、どうしても比喩のように自由に広い範囲に材料を求めることは困難である。その制限ある中から序詞に使用された植物名を次に示す。例歌をあげるかわり、植物の名とその本意への懸り方を記してみよう。片仮名が植物名であり、下の数字は国歌大観番号である。

アシビの花の——悪しからぬ 8 一四二八・10 一九二六

アリマスゲ——在り 11 二七五七・12 三〇六四

イチシの花の——いちじろく 11 二四八〇

イチシバの——何時しか 4 五二三

イソシバ原——何時も何時も 11 二七七〇

イツモの花の——何時も何時も 4 四九一・10 一九三一

ウノハナ——厭<sup>う</sup>き事あれや 8 一五〇一・10 一九八八

オモヒグサ——ものか念はむ 10 二二七〇

カヅノキの——吾をかづさねも 14 三四三二

サキクサの——幸<sup>さい</sup>くあらば 10 一八九五

サナカヅラ——さ寝<sup>す</sup>ずは 2 九四

シキミが花の——しくしく君に恋ひ 20 四四七六

シナヒネブ——吾は隠ひ得ず 11 二七五二  
 シノの芽の——人に忍べば 11 二四七八  
 同 ——しのびて寝れば 11 二七五四  
 シラスゲの——知れにし為と 11 二七六八  
 シラツツジ——知らぬこともち 10 一九〇五  
 シリクサの——人皆知りぬ 11 二四六八  
 斎ふスギ——思ひ過ぎめや 13 三二二八  
 スギ群の——思ひ過ぐ(過ぎ) 4 四二二・9 一七七三  
 スガノネの——ねもころ 4 五八〇・七九一・11 二四七三・二七五八  
 ・12 二八五七・二八六三・三〇五四・13 三二八四・20 四四五四  
 チチノミの——父の命 19 四一六四・20 四四〇八  
 ツガノキの——いや継ぎ継ぎに 1 二九・3 三二四・6 九〇七・四二  
 六六  
 八峯のツバキ——つばらかに 19 四一五二  
 トコロヅラ——いや常しくに 7 一一三三  
 ナノリソの——名は告ル 3 三六二・三六三・12 三〇七六・三〇七七  
 ・三一七七  
 ナハノリの——名は曾て告らじ 12 三〇八〇  
 ナラシバの——馴れは益らず 12 三〇四八  
 ニユグサの——にこよかに 11 二七六二・20 四三〇九  
 ハナガツミ——かつても知らぬ 4 六七五  
 ハハツバの——母の命 19 四一六四・20 四四〇八

浜ヒサキ——久しくなりぬ 11 二七五三  
 若ヒサキ——吾久ならば 12 三一二七  
 深ミルの——深めて(し) 2 一三五・13 三三〇一・三三〇二  
 フデノ末葉の——うら安に 14 三五〇四  
 マタミルの——また去きかへり 13 三三〇一  
 山マツの——待ちつつそ 4 五八八  
 荒磯マツ——吾を待つ児等 11 二七五一  
 モモヨグサ——百代いでませ 20 四三二六  
 山クサの——止まずも妹は 11 二八六二  
 ヤマスゲ——止まず 12 三〇五五・三〇六六  
 ヤマスガノ根の——ねもころ 12 三〇五一・三〇五三・13 三二九一  
 ヤマブキの——止む時もなく 10 一九〇七  
 草深ユリのの——後にとふ 11 二四六七  
 サユリバナ——後といへるは 8 一五〇二  
 サユリバナ——後逢はむと 18 四〇八七・四〇八八・四二一三・四  
 一一五

右、概観したところを見ると、この用法は十一巻・十二巻の作者不明の相聞歌に最も多く、ついで同じく作者不明の十巻・十三巻の相聞歌関係である。この作者不明の四巻に、例歌の半分以上が集中している。

作者不明の巻で案外なのは七巻と十四巻に非常に少いことである。

七卷の「譬喩歌」の標目下に収められた寄物の中には、植物に限らずこの用法が甚だしい。この部も亦相聞抒情であるけれど、十一・十二の巻の相聞歌には植物用例だけでも相当多いのと比べてみて案外な感がある。何かの事情が伏在しているのかもしれない。

十四巻にも比喩形はかなり見受けるがこの用法は少い。石崩の「君が悔ゆべき14三三六五、葦穂山あしほ||悪しかる咎三三九一、兎狙うさねはり||をさ

をさも等、若干の例と植物二例ぐらいである。ただヤマスゲの「背向そむひに寝しく、をこの例の中に入れるかどうか、スゲーソガの類似音ではあるが、これはやはり実状を以て比喩にしたのであろうと、私はその生態を観察した結果解釈したいと思うのでこの例から省いたのである。

この序詞形で注目されるのは、数多くはないが一巻・二巻などの古い歌の多い巻に見えることである。人麿の作にもツガノキの「いやつぎつぎに、というのがある(1二九)が、これを使用したのはすべて人麿より後代の人、山部赤人・笠金村・大伴家持等である。してみると創始したのは人麿ではないかとも考えられる。人麿に枕詞の多いのは周知のとおりで、中には人麿以前にないもの、又は人麿だけが使用するものなど、人麿によって作り出されたと思われる枕詞もある。この「ツガノキの」も、枕詞と言えるものであるから、人麿が作り出した用法ということも否定し得ない。又、サナカヅラ―さ寝ずは、これは藤原鎌足の歌に見えるもので人麿より更に古い。サナカヅラ(サネカヅラともいう)の集中用例確実なもの八例、不確実なもの一例のう

ち、比喩に使用七例、(枕詞といわれるものでも比喩的用法のものは比喩とした)、実景一例と、この序詞形一例である。古い植物序詞の一つである。

なお、一方に十八巻・十九巻・二十巻等、家持関係の巻々にも比較的現れている。ことに家持の作に多く、且つ、チチノミの「父、ハハソバの―母、八峯のツバキ―つばらかに、など家持だけの使用例もある。

要するにこの序詞形は、年代的には長くうけつがれたが、比喩形のように広く華々しい舞台には登り得なかったということである。

序詞形と見るべきもう一つの形、懸詞的なものはさらに僅少であるが万葉にもそれに属する修辭法は現れている。(妻)梨の木10二一八八・沖つ白浪立田山1八三・入江の薦いぐさをかり(刈・仮)にこそ11二七六六・木垂る木をまつ(松・待)と汝が言はば14三四三三などであるが、植物面でも種類は至って少い。

ただススキやイネなどの穂に出るものが僅かに目につく。ハタススキ―穂に出づ、の用例は五例ほどある。

比喩が、物の形態を視覚的に捉えて心情表出の助けとするのに対し、序詞は、物の呼称を音調的に把握して本意の何かに関連させる方法と言えるであろう。

3 人間は現状に満されない時願望という形で欲望を起し、それを何かの物に寄せて表現することがある。何々になりたい、何々であつてほしい、何々を得たい、とそれぞれ理由によって対象物は異なる。だがすべて人間の非力を自覺するところに発する。鳥になりたい―遠くへ自由に往来できるから、玉であつてくれ―愛する者を常住に携えていられるから、酒壺になりたい―酒びたりでいられるから、とそれぞれに理由はある。衣・弓・鋤・刀等の器物類・水・露、それに動物類及び植物など象対物は様々である。

植物ではナデシコ・クレナキ・アキハギ・ウメ、それに単に花というのものもある。

父母も花にもがもや草枕旅は行くとも捧<sup>ささ</sup>ごて行かむ

20 四三二五 丈部黒当(防人)

防人は任務の為に遠い筑紫へ行かねばならない。父母や家族達も同行したいが、それはかなえられない。現実のままの状態では不可能である。それならばせめて、花にでも変えて携帯してゆきたい、という切実な願<sup>くね</sup>いがこのような発想となり、表現となった。

紅の花にしあらば衣手に染めつけ持ちて行くべく念ほゆ

11 二八二五

これはどういう事情のもとに詠んだものかは不明であるが、愛人同士の離間が背景となっていることは想像できる。当時は、正式な夫婦

の間でも居を別々にして住む習慣であつたから、夫婦の間にもこういう歌は生れうるし、又、その他の妻達とは当然別居であるからそういう感情は強い。旅行によるしばしの別離といえども今日とは比較にならないほどの不安、寂寥は強く、時には絶望感さえ伴う場合もある。そういう時代に生きて、こうした発想を単なる表現の技巧としたとは思えない。もっと迫まつた欲望、というより願望が生んだ表現だと思ふ。

なでしこのその花にもが朝な朝な手に取り持ちて恋ひぬ日無けむ

3 四〇八 大伴家持

わが屋外<sup>やど</sup>に蒔<sup>ま</sup>きしなでしこいつしかも花に咲きなむ比<sup>なま</sup>へつつ見む

8 一四四八 同

どちらも後年の妻、坂上大嬢に贈るものである。家持は他の妻や愛人にもナデシコを連想した歌があり、後出のように同性にもあるから、特定の人に対しての花の連想ではなくこの花への親愛感が親近者に結びつくのかもしれない。

この可憐な美しい花が、時によると男にさえナデシコであつてほしい、と願うことがある。

朝毎に吾が見る宿の撫子の花にも君はありこせぬかも

8 一六一六 笠女郎

この場合の「君」は恋の相手家持である。ナデシコと家持との間に形容的な連想があつたのか、又は二人の間にナデシコが何かの関係を付けていたのか、或は偶然の矚目か、その点は今にわかに判断しかね



る。

このほかにも、男性から男性をさして言う場合もある。

うら恋しわが背の君はなでしこが花にもがもな朝朝見む あさあさな

17 四〇一〇 大伴池主

越中時代の大伴家持が池主に贈った歌への答歌である。家持の方からは池主に対して「吾が背子は玉にもがもな」と言っている。家持が越中から入京する際であるから、下僚の池主を玉にしてつれてゆきたい、というのであって、それに答えるに池主からは家持をナデシコにして側におきたいと応酬したので、ここに至れば、こういう表現は一種の社交的辞令となった感がある。

同様の例は次の歌にもいえる。

後れ居て長恋ひせずは御園生の梅の花にもならましものを みそのふ

5 八六四 吉田宜

愛しみ吾が思ふ君はなでしこが花に比へて見れど飽かぬかも うらほ

20 四四五 大伴家持

前歌は大伴旅人への書簡の中に書き添えたもの、後歌は、橘家の宴に、追和の形で主人へ贈ったもの、どちらも上位者への敬愛心情の表現で、防人歌などからは遠いものである。

吾妹子に恋ひつつあらずは秋萩の咲きて散りぬる花ならましを

2 一二〇 弓削皇子

当時、恋の究極的な感情を、何々しないでむしろ死んでしまいたい、というように歌った。「かくばかり恋ひつつあらずは高山の岩根

し枕きて死なましものを286」をはじめ、47三八・112四九八・二六三八・二七六四等その例は多い。この歌は、死んでしまいたい、というべきところを花になって散ってしまいたいと願う。時代は下るかと思うが類型的なものに次の歌がある。

長き夜を君に恋ひつつ生けらずは開きて散りにし花ならましを

10 二二八二

死ぬ、というところを何故花になって散ってしまいたいというのか、そこに人間と物との或る問題が潜んでいるように思う。

物に寄せて願望する形は他の物にも多い。山を高くし、天への橋を長くしたい、月世界へ行く為に、と。人間の非力・不幸を物によっても救われたいという、人間の永遠の夢がこうした歌を生んだのではないだろうか。

## 七

「寄物」とは、要するに人間が心情をのべる一つの方法である。万葉集の七・十・十一・十二の巻々における、いわゆる「物に寄せて思を陳」べるという部類の中には様々な方法や型が示されている。そして、従来、これを多く修辭の面から扱った。だが、もし「寄物」という概念の範圍をもっと広げて見ることを許されるならば、初歌に記したように、修辭的問題を離れてその各種の相をも寄物の一類として認めることも出来るのではなからうか。結局人間は「物」の中に生きねばならないとすれば、人間がその「物」を自己の中にどのようなに捉

え、その「物」によってどのように生きてゆくか、という問題を常に背負ってゆかねばならない。それが、「歌」という抒情の世界に於いてどんなに展開されるか、従来の修辞問題を一つの木戸としてその一端に触れようとしたわけである。

(本学教授・文博・国文学・筆名若浜汐子)